

「埴町都市計画マスタープラン策定委員会」(埴町)(令和2年度)

ふくしま自治研修センター
総括支援アドバイザー兼教授 奥原 英彦

「埴町都市計画マスタープラン策定委員会」(埴町)(令和2年度)

埴町では、平成11(1999)年3月に「埴町都市計画マスタープラン」が策定されていたが、その後の社会経済環境情勢などの時代変化に対応したまちづくりを進めるため、令和3年度に新たな「埴町都市計画マスタープラン」(注1)を策定することになった。

一方、令和元年の台風19号による被害などにより、住民のまちづくりに対する安全安心へのニーズが高まってきている。

このため、埴町では令和2年度から「埴町都市計画マスタープラン策定委員会(以下 委員会)」を設置。安全安心で住みやすい埴町の実現を目指し、20年後に向けた計画づくりに取り組んでいる。

(注1) 埴町を含む福島県「県南都市計画区域マスタープラン」が平成26年に策定されている(福島県ホームページ): [08. 県南区域MP\(本編\)260522\(fukushima.lg.jp\)](http://08.県南区域MP(本編)260522(fukushima.lg.jp))

令和2年度、奥原は委員会の会長として、下記の支援を行った。

- (1) 2回の「委員会」の「運営」(9/30、12/17)
- (2) 上記(1)の委員会における各委員発言の総括と政策展望((注2)、(注3))
- (3) 3回の地域別懇談会(注4)(10/29、11/12、11/17)に参加し地区の意見を聴取
- (4) 令和元年の台風19号による被害箇所の現地視察(6/18)(水害発生構造の把握)

(注2) 9/30(20年後をめざしたまちづくり)における委員発言の主な総括と政策展望

- ① 人口減少や(温暖化による)自然災害多発などの時代変化を見据える

これからの時代は人口減少を前提とした社会を考える必要がある。また、自然災害も多発していることから考え方を変えなければならない。

自然災害に関しては、寺西封元八カ条の第一条が「天はおそろし」であり、(気をつけることは)自然災害について、まず、考えるように言っているのではないかと。

ただし、安心・安全を考える際に、内向きになるのではなく、埴町の明るい社会の20年後をめざし、まちづくりのビジョンや将来像から(バックキャストで考えることで)やるべきことが見えてくると思われる。

- ② まちづくりは、公助、共助、自助で進める時代が来ている。

まちづくりに際して、かつては行政主導で開発(整備)という考え方であったが、近年は公助だけでなく、自助や地域での共助が重要だという流れになってきている。

行政担当者も減っていることから、災害時に地域で高齢者をどう避難させるのかと

いう公助も考える必要がある。

また、自助としては、減災の考えとして降った雨を自分の家や周辺で貯めて外に流れないようにする、あるいは、交通安全のためにできるだけ車に乗らないという対応もできるのではないかと。個人がまちづくりに参加する時代となり、身の回りから考えられるような対応も考えたい。

③ 安心・安全を確保しながら経済を活性化していくという観点が重要

例えば、浸水被害を無くすために堤防を整備するだけでなく、そこに親水空間を形成する、たとえば四阿（あずまや）をつくり、花見での経済効果を発生させるなど、防災と経済は共存できるのではないかと。最近ではSDGs（持続可能な開発目標）に貢献する企業でないと存続できない、あるいは、ESG投資といって、環境（E）社会（S）ガバナンス（G）を重視する企業に投資するといった考えも広まってきており、安心・安全を確保しながら地域を活性化していくという観点が重要ではないかと。

（注3） 12/17（安全安心のまちづくり）における委員や事務局発言の総括と政策展望

① 都市計画マスタープランは、都市計画区域だけでなく周辺地域も含めた全体で

戦後急速な人口増加に対応するために都市計画法はできたが、今度は逆に人口が減っていく中での都市の課題は、都市計画区域内だけでなく、区域外（の農山村）との（相互補完的な）関係で解決しようという流れになって来ている。

② 安全安心には「レジリエンス（しなやかさ）」という視点が大事

自然災害が多発する時代になり、国土強靱化への取組みが行われているが、その際には、「レジリエンス（しなやかさ）」という視点で防災や減災の取組みを進めていく必要がある。例えば、農地や山林での貯水機能を活かして上流から水害を防止する、地域が山林を良くしようとすると下流の水害を減らすなどの効果を活用するのが、レジリエンスの考え方である。

③ 「コンパクトシティ化」と「ソーシャルキャピタル活用」は埴町特性を反映

埴町の市街地は、もともとは田んぼだったところが埋め立てられて形成されてきた経緯から、「安全安心をコンパクトシティ化のリノベーション」で実現することは、埴町の地理特性や歴史的経緯を生かした方向性と評価される。

さらに、埴町では歩いて逃げられない高齢者を、同じ地区の方が公民館まで車で連れていくなどの相互扶助的な活動が行われていることから、（公助、自助の）「ソーシャルキャピタルを活用する」考え方も、地区活動という視点が入り元気が出てよい。

今後、県の計画など上位計画との文言も含め調整して、最終的な案を作してほしい。

以上